

十神山



会報 安来節

YASU GI BUSHI

発行所 安来節保存会

〒692-0064
島根県安来市古川町534
TEL 0854-28-9988
FAX 0854-28-9393
http://www.y-hozon.com/
E-mail:admin@y-hozon.com



二代目 高山保子
唄の部(松江)



渡部 香寿子
唄の部(本部道場)

◆准名人(二名)



佐々木 偉市
絃の部(大東)

◆名人(一名)

上位昇格者

11月12日に開催された安来節保存会代議員会において、平成31年度の上位昇格者と表彰者が報告されました。今回、絃の部で大東支部 佐々木偉市さんが4年ぶりに名人になられ、准名人に2名、大師範に10名の方が昇格されました。おめでとございます。来年の1月10日の唄い初め会において、免状・表彰状の授与と昇格披露を行います。

◆大師範(十名)

- 唄 弓 浜 マキ子 (本部道場)
- 唄 松 崎 祥 江 (本部道場)
- 鼓 一 字 川 耕 士 (本部道場)
- 鼓 小 池 孝 子 (本部道場)
- 唄 小 早 川 盛 世 (仁多)
- 唄 小 豆 澤 玲 子 (松江)
- 唄 日 野 いくえ (米子)
- 唄 福 原 由 美 (広島)
- 絃 橋 本 邦 明 (広島)
- 踊 寺 尾 源 造 (関西)

会員表彰者

(二十七名)

- 川 上 博 文 (本部道場)
- 野 口 艶 子 (本部道場)
- 和 田 俊 助 (加茂)
- 春 日 栄 子 (湖陵)
- 丹 羽 千 恵 美 (湖陵)
- 加 藤 紀 美 子 (大社)
- 和 久 利 健 (仁多)
- 石 田 岩 子 (浜田中央)
- 和 田 和 子 (浜田中央)
- 矢 野 雅 義 (斐川)
- 雲 州 全 信 (平田)
- 大 庭 恭 子 (益田)
- 安 達 哲 彦 (松江)
- 足 立 伸 代 (東伯)
- 加 藤 和 子 (鳥取)
- 津 村 安 子 (米子)
- 三 浦 美 香 子 (江田島能美)
- 野 津 圭 美 (広島東)
- 三 谷 博 (岡山)
- 原 田 由 紀 子 (伊予道後)
- 山 影 ヤス子 (松江)
- 河 野 文 子 (関西)
- 吉 永 秀 夫 (関西)
- 鍋 島 靖 子 (関西)
- 中 谷 陵 子 (神戸)
- 一 字 川 清 子 (大津)
- 吉 川 昭 伸 (関西)

(代議員会資料名簿順)

私と安来節

加齢と安来節の思い出

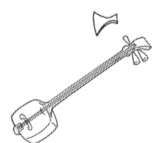


長 安 夫
資格審査 上代 (松江支部)

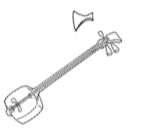
昭和五十年代初め頃、今は亡き二代目出雲愛之助師の言われた一言「若い時には楽に出来た事が努力しなければ出来なくなり、さらにそれが努力しても出来なくなる」と、当時は、松江市内や玉造温泉にも観光客への安来節の常設演芸館があり、忙しい時代でした。出演時に愛之助師と出会う事があり、その時に楽屋で言われた事を今でもよく覚えています。愛之助師の存在は、レコードや兄から聞いて知ってはいましたが、そのお方が舞台上に立てば常に高度な理想の唄をと、全力で唄っておられた証であると思います。

私は、七人兄弟で兄の茂則は、昭和二十六年より安来節保存会に入会しており、昭和三十年代初め頃、正月に兄弟全員揃うと「久しぶりだのおー」と、夜中の十二時頃まで唄っていました。私が安来節を始めるきっかけになったのは、昭和三十六年八月に松江大橋で恒例の源助まつりがあり、愛之助師一行の演芸を見て、そろそろ自分も習ってやってみたくなり、その年の十二月、兄の用事で行き、知っていた松江の高山雅市師の家を訪ねたところ「三味線がないから」と三代目富田徳之助師匠を紹介されて行ったのが始まりです。以後は、月に十数回稽古に通い、松江支部にも入会しました。入会したてに録音機を買った。録音し、自分の唄を聞いた時には、大変がっかりしました。もつと良い声で上手く唄えていると思っていたのに、唄った感じと聞いた結果には差があると気づきました。幸い松江支部では、良き先輩、良き同僚にも恵まれ、順調に育てられました。

昭和四十五年の大阪万博での三日間出演や度重なる県外公演にも出掛けましたが、何と言っても三十代、四十代の声の盛りに民謡館や旅館での出演が多かったのが、良い修行になりました。今は亡き当時の芸能社の方々へは、感謝の意を伝えたいです。そして長い年月が過ぎ、八十年代半ばとなり、若い頃のように唄えませんが、生涯現役でと、考えているので一年でも一日でも永らく精魂込めて唄い続けたいです。



私と安来節



安来節と共に



長資格審査副
原 文男
(松江支部)

平成三十年も終わりに近づき、

思うことは、「時代はずいぶん変化したなあ」ということです。夏の安来節全国優勝大会ひとつとつとつても、私が十歳の頃に出場した時は、小学校の講堂で行われたのですが、その後、安来市民体育館に会場が移り、民謡プールの頃には参加者も多く賑やかなものでした。そして、今年は初めて安来市総合文化ホール「アルテピア」で開催されました。整った環境での演技にみなさん喜ばれたことと思います。

さて、私も年を重ね、人生を振り返ることも多くなりました。この機会に昔のことや安来節について、少し書かせていただきたいと思っています。途中休会はしたものの、保存会に再入会し、本格的に稽古をするようになったのは三十四歳の頃でした。当時、三味線は三代目富田徳之助先生にご指導いただきましたが、初めの頃は、安来節だけでなく、落語などに使われる出囃子(でばやし)の練習をするようにと言われ、二年間ひたすら出囃子の稽古をしました。出囃子の稽古をして手の動きや撥さばきの練習をしたことは、とても良

かったように思います。私の場合、

鼓、唄、踊りにしていても、先生方に細かい指導をしていただくと

いうよりは、見て、聴いて、感じて学びとると言った具合でした。それから基本を基に試行錯誤を重ねながら稽古に励み、長い年月をかけて現在の形に辿り着いたと思います。私が演技で大切にしていることは、「際」(きわ)の動作です。

- 唄 手拍子で言はば手を打つ「際」
- 絃 撥が糸に当たる「際」
- 鼓 指が皮に当たる「際」
- 踊 床に足がつく時と離す時の「際」

これら種目の「際」とは、優しく、そしてやや強く、強弱やスピードにメリハリをつけるよう心掛けています。言葉にするのは簡単ですが、安来節の演技は難しく、今でも自分の演技に納得いかない部分もあります。しかし、その奥深さが安来節の魅力でもあります。ところで、来年は、天皇陛下が退位され、元号が変わります。これを機に、私も心を新たにし、微力ではありますが、会員の皆様のお役に立てるよう力を尽くしたい、このように思っております。

男踊りとの

出合いに感謝



三代目 砂川 清
(米子支部)

安来節との出合いは、昭和五十年に勤め先の課で演芸会があり、同僚が隠岐のしげさ節を唄い、やんやの喝采、これを見て是非自分も、と思ひ渡部昭信さんに相談し、西村唯夫師を紹介して貰い、唄を習いました。翌年の昭和五十一年二月に入会、初めて審査を受け、唄一級でした。その後、唄の師匠西村唯夫先生に連れられ、米子市加茂町の初代砂川清師宅にお願いに伺いました。第一声が「踊りを教えるが途中で脱落し、稽古に来

安来節との出合い!



佐藤 征司
(東北支部)

最初に安来節保存会役員の皆様、各支部の皆様、日頃のご活躍に感謝を申し上げます。

さて、私の生まれは、宮城県北部の農村地帯で小さい頃から近くの川や用水路、ため池でよく魚を取っておりました。その中には、もちろん、どじょうもおり、雨が降り出すと田んぼにどじょう取りのドを仕掛けに行つたものです。この地域では、祭りに南部神楽、

なくなるようなら教えない。途中で脱落されたら、そこまで教えた事が何もならない。最後まで続ける覚悟は出来ているか」と言われ、

「はい、覚悟して来ました」と答えました。それ以後、勤務の合間、休日に通い続けました。初めは早いリズムと細かい所作に自分にも覚えられないだろうかと不安もありましたが、無我夢中で続けている内に病みつきになり練習しないと眠れないようになりました。家が農家で水田、用水路等に生息する泥鰌の生態を見て育ち、所作を実感として工夫出来た事と砂川流は踊り全体の所作が日本舞踊に通ずる事もあり、より洗練さを出すために日本舞踊の藤間流にも十年間通いました。また、当時は最近のような感度の良い音響機器も無く、放送局で使う大型のテーブルコーダーを使用しての男踊りの稽古で

股旅踊りがよく行われており、私も股旅踊りに関心がありました。現役引退後に、老人ホームのデイサービスで朝晩の送迎運転手をしてた居り、何か楽しい事を披露したいと思つていたところ、地方紙のカルチャーセンターで仕事の空き時間に、どじょうすくい踊りがあり、早速入会いたしました。ご指導して下さいました先生を見て、何てスムーズに細かい芸をリアルに綺麗に淡々と踊られたのを見て、私の将来を自分なりに想像して、あのように踊れたらいいなと夢を持ちました。それから安来節保存会の存在を知り、当時の仙台支部へ入会させて頂く事になりました。島根県安来市に伝わる伝統芸能を先生から教わる事への楽しさを練習を通じて感じ、表情、仕草、間

した。

また当時、出雲友武さんという良きライバルがおられ、闘志の源であつた事が思い出されます。また、踊り一級の時、予選に挑戦するも予選落ちし、悔しさからその日の夜から翌年の予選会まで一日も休まず猛練習し、予選を通過、大会では初段の部で優勝する事が出来ました。

入門以来、四十二年の歳月が流れ、砂川流の三代目を襲名、ここ山陰の地に生きる喜びに感謝し、これからも男踊りの伝承と後輩指導に傾注すべく努力していく決意です。座右の銘として日頃胸に秘めている言葉として、「平常心を掴むために練習する事」を忘れず、これからも精進を重ねていきたいと思つていきます。

今後共、ご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

の取り方、歩きに数年など、どじょうすくい踊りの奥深さを教わりました。また、私は腰痛持ちで時々整形外科にて治療をしておりましたが、踊りを始めてから足腰の筋肉が付いたのか、ぱったり腰痛がなくなり、自分でも不思議な位です。

安来節大好き



長原 ミチコ
(浜田中央支部)

安来節を始めたのは、友達から言われた一言でした。私の心に火を付けてくれた言葉、今となっては重い忘れられないものとなっています。

今は亡き、長野久子先生の教室に通い始めて早三十三年にもなる今日、どこまで行つても難しく、悲しくなる時もあり、少し出来た時は楽しく、嬉しくなり、泣いたり笑つたりの日々が何度もありました。お陰様で良き仲間にもお会いし、多くのお友達もでき、皆様方に支えられながら、今日まで何とか頑張つて来ることが出来ました。

また、平成二十三年には、身に余る唄・大師範に昇格し、八年目になります。学ぶことが多く、全身で向き合いながら、日々過ごしたいと思っております。

平成三十年のお糸まつりに特別出演して、この様な日が私に来るとは、知る由もなく、夢を見ていたような幸せと感動の一日でした。安来節に感謝いたします。

安来節唄って今日が暮れ
明日も唄って暮れていく今





「どじょうすくい踊りで健康になろう」大きなビラが目に残りました。これはひよつとして、ハハーンあれだ。職員旅行で、宴がたけなわになり、その時、どこからか「安さん（男性の体育教師の安永先生）が、あれ、あれ、あれをやらないと終われないよ」の声が飛んだ。すると、丸いお盆を持った先生と座布団を脇に抱えた安さんの二人が「あらえつきささ」とどじょうすくいを踊りました。会場は、ワァーという笑い声と拍手でいっぱいになりました。考えてみると正確には、これが最初の出会いだったのかもしれない。

しかも、私も飛び級昇格したと言われ、ひよつとしたら私上手なのかも？と勘違いして気分を良くし、稽古、ボランテア、会員勧誘活動と頑張り、あらゆるイベント等にも参加しました。中でも海外から来られた青年やその御家族との体験は大変喜んでいただきました。

また、NHKの朝ドラ「ゲゲの女房」関係者の方から「安来節を唄うシーンがあるので、唄を教えてください」とか、民間放送局からも出演依頼等もありました。その他、ラジオのFM横浜で二人踊りをしたところ、面白かったと好評で後日、一人踊りと安来節の話を四時間以上させていただきました。この放送の効果で何人かの人達が来てくれました。

色々な事がありました。安来節が大好きで、八十歳を過ぎてでも師範挑戦し続けています。私にとって安来節は、踊り、銭太鼓、唄の上達はもちろんですが、それ以上に素晴らしい先生に巡り会い、御指導いただけました。人生の宝物です。この宝物の素晴らしさを一人でも多くの方と分かち合うためと伝統芸能の発展のために頑張っていきたいと心より思っています。

「安来節よ、ありがとう」



私が安来節と出会ったのは、もう十数年前になります。その間に色々なことがありました。主人が亡くなり、落ち込んでいたときも、先輩方や仲間が背中を押し、励ましてくれ、安来節を聞き、唄い、前を向くことができました。

中学1年生、小学4年生、小学1年生の3人が踊りを習っています。私の押しつけで始めたわけでもなく、中学1年生の男の子は小学3年生の時から楽しそうに踊っています。小学校の卒業アルバムにも、どじょうすくいの衣装で写っています。お楽しみ会では、テープと衣装を持っていき、クラスメイトの前で披露したそうです。



孫たちがこれからも、どじょうすくいを楽しんで踊ってくれることを願っています。今後とも先生方のご指導よろしくお願ひいたします。

追伸：パパも早く一人前になれるよう頑張ります！

支 部 情 報

初めての体験で
会員増員



砂川弘子
(大利根支部長)

今年、初めて大きな舞台の出演依頼を受け、宣伝活動の一貫として、二つの舞台を引き受けることにしました。

一つは、浅草公会堂への出演、もう一つは、千葉県柏市民大ホールへの出演依頼でした。まず会員に出演参加を募り、「どじょうすくい二十人踊り」

と題して、総勢二十六名（唄と絃含め）の参加で舞台を務めました。

浅草公会堂では、花道を使い賑やかに、柏市民大ホールでは、舞踊の会主催のため「所作台」使用で白足袋を着用しなければならず、赤タスキをして

お座敷芸風にお座敷芸風に砂川流四名の踊り手を加えて演じてみました。銭太鼓の出演も含め、参加した会員の皆さんより「楽しかった」と言う声をい



ただ、会員相互の交流が和やかに行われました。最後にお客様の中より数人の方が入会され、会員増員が実現しましたことを報告させていただきます。

会員必携 図 書

～メンタル・スキル 向上のために～

「よみがえる安来節」
価格 1,800円

基礎編

「唄われて100年の魅力」
価格 1,000円



発行 出雲街道民謡交流会
090-2809-1233 (渡部孝夫)

感動を呼ぶ 音色と 響き 丹念な加工 調整 仕上げ

(有)仁木三味線

製造・販売/修理 三味線・鼈甲撥・尺八・太鼓

〒240-0022 神奈川県横浜市保土ヶ谷区西久保町197-1

TEL 045(713) 4319 FAX 045(741) 4796

HP <http://www.syamisen.com/>

ふすべ餅と 郷土芸能交流の 旅を終えて



棚橋 保
(東京支部長)

はじめに 食材として「どじょう」を使った珍しい郷土料理との

出合いは、東京支部として十年以上の歳月の想いを込めた行事としての旅でした。十月二十一日〜二十二日「ふすべ餅」を求めて宮城県のかくりこま高原まで行ってきました。ここでいうどじょう汁は、野菜のごぼう、大根を摺りおろし、煮込んだ中へ、どじょうの泥をはかせ、囲炉裏で燻し（ふすべる）、粉々にしたものを味噌等で味付けし、その中へお餅を入れたものがあります。

今回参加した方々にアンケート順に感想を書いてもらいました。

① どじょうを使った「ふすべ餅」は、いかがでしたか？

● 温かい汁に入れたお餅は、大変おいしい味でした。どじょうの臭みもなく、材料に手を掛けただけあり、どじょう汁のおいしさを堪能できました。また食べたいです。

② 芸能交流会は、いかがでしたか？

● 文字甚句を初めて鑑賞しましたが、情感たっぷりでも良かったです。

● 新しい交流ができて、大変良かったです。演芸の世界の楽しさを再認識しました。

● 妹尾なおみさんの唄が聞けて最高!!

③ バスでの観光地巡りは、いかがでしたか？

● 天候に恵まれ、遠くの山々や雲海が良く見えて、心の安らぎになり、英気を養えたように思います。

● 紅葉が見頃で良かった。また、「花山温泉仙台藩寒湯御番所跡」等々、歴史の足跡も学べて良かったです。

④ その他のご意見

● 本当に楽しい一泊二日でした。また次もお願いします。

● ミニ女子会ができて、とても良かったです。ありがとうございます。(小林よし子さん)

● この度は、お声掛けいただき、ありがとうございました。(妹尾なおみさん)

● 終わりに参加者の皆様のご協力に感謝申し上げます。また、栗原観光物産協会の高橋義明さんには、企画当初から私達の要望の取り入れにご尽力いただき、感謝申し上げます。さらに加茂支部の妹尾なおみさんには、私が「東北の地で安来節を熱唱してもらいたい」との要望に快く引き受けていただき、二日間で三千kmの移動という強行軍でした。ありがとうございました。



安来節保存会東京支部 ふすべ餅と郷土芸能交流の旅

会員の声「コーナー」

師匠と私



渡部 二郎
(松江支部)

私は、人様から「あなたの師匠はどなた」と聞かれたら、「師匠は三代目富田徳之助です」と答えます。自分の師匠だから敬称略です。

● 師匠との出会いは、昭和五十年の秋、私三十一歳、師匠七十五歳の時、勤め先の民謡同好会の講師として呼んだのが始まりです。安来節の唄を習い、銭太鼓を習い、そして師匠が「この中で三味線する者はおらんか」との事で「私、やってみます」と、唄と三味線、両方本格的に始めました。そして五十一年三月、安来節保

どじょう すくい宝物



加藤 光栄
(東海支部)

私はどじょうすくい踊りに出合っで、まだ七、八年です。楽しくて、嬉しくて、仲間達と集い、練習しています。今年に入り、同期に入会した友が、突然一ヶ月余りで逝ってしまいました。私は、通夜でどうしても、どじょうすくいを踊りたくて、御家族の許しをいただき、

● 存会松江支部に入会しましたが、松江支部の審査会が終わっていたので、六月に本部道場審査会で受審し、唄、絃共に二級に合格しました。以後順調に昇格、五十五年六月に師範挑戦、唄はダメで絃は師範となり、ますます熱が入り、特に絃の方で頑張るようになりました。またま住んでる所が師匠と同じ八雲村(現松江市八雲町)だった事でちよくちよく師匠宅へ通いました。幾度となく通った中で、師匠が「三味線は、そこに置いて、こっちだ」とテーブルを囲んで酒の相手と話で稽古は終わりと化した事が多かったように思われます。数多い弟子の中で三味線の稽古より酒を飲む稽古をした弟子は、私ぐらいかなと思っております。しかしながら、師匠が保存会の事あるごとに「これは俺の弟子だ」と言ってくれました。師匠の弟子となれば、そこそこの三味線を弾かないとダメだと頑張って稽古をしてきました。おかげで保

存会でもそれなりの資格をいただく事が出来ました。これも師匠のおかげかなと思っています。それと今一つ師匠の教えを守り続けている事があります。それは三味線を弾く時、今はほとんど椅子を使いますが、控室などが畳や板場にゴザが敷いてある所であぐらをかいた状態で三味線を弾く人を見かける事がありますが、師匠曰く「三味線を箱から出す時、弾く時、箱に入れる時まで正座してするもんだ。ただし途中で休憩をする時は、三味線を置いてからあぐらをかく、休憩が終わったら、正座をして三味線を手に取り、構える、これが礼儀だ」と言われた事です。この教えを頭におきながら、今でも三味線を弾いております。私も今年、七十五歳になり、初対面の時の師匠と同じ年齢になりました。師匠は、平成七年に九十五歳で亡くなりました。私が九十五歳まであと二十年、これからも体調管理に留意し、元気で楽しく三味線を弾いていこうと思います。それから微力ながら保存会発展の為に尽くして行きたいと思えます。

事務局からのお知らせ

- 会報「安来節」に原稿をお寄せください。
4月と12月に発行する会報「安来節」にご寄稿をお待ちしております。安来節との出会いや思い、支部の活動や発表会、保存会の今後など題は自由です。
いずれも1,000字程度で寄稿者の顔写真(1年以内の物で使用後は返却します)も併せて送ってください。